

獅子で付き合う、獅子で競う 広東の醒獅

彭 偉文 (COE研究員・RA)

せいし
醒獅とは、嶺南醒獅、広東醒獅とも言い、広東獅子舞の代表的な一つであり、珠江デルタにおける獅子舞である。現在、世界で「チャイニーズライオンダンス」と言われているのは、実はこの中国のごく一部で行われる醒獅であり、中国におけるさまざまな獅子舞のなかで際立つ存在と言ってよいであろう。

中国の漢民族地域に獅子舞が散在しているが、元々、獅子(ライオン)は生息せず、その語源も不明である。最初は「師子」と書かれていた様である。『後漢書』の巻三で、漢・章和元年(87)に西域から「師子」が献上されたことが記されている。約550年前後に書かれたとされる『洛陽伽藍記』に、仏像巡行の行列に「有辟邪獅子、引導其前」とあり、獅子舞が初めて史料に姿を現した。以来、随筆や詩文などに折々見られるが、唐の中期までに、漢民族の間に広がっていたと断言するには、更なる検討が必要である。漢民族の民間芸能としての獅子舞の定着について、まだ明らかでないが、宋の「百子嬉春図」で、子供遊びの獅子舞が描かれており、現在中国でよく見られる獅子舞の形はすでに整っていたと思われる。

獅子舞の長い歴史の中で、醒獅の歴史は浅い方である。伝承によれば、清・乾隆時期(1736~1775)まで遡る。明代に登場したとも言われるが、清の初期に書かれ、広東の歴史や地理、人文などが詳しく描かれている『広東新語』に醒獅の記載がないことから、その事実は明らかである。

醒獅は歴史こそ浅いが、無視できない存在感を増してきたことから、清・民国時期の地域社会に強く関わっていたと思われる。

珠江デルタはそもそも豊かな自然に富み、清の康熙から200年近く続いた鎖国政策の中で、広州は巨大な帝国における唯一の合法的な国際貿易港であり、正に中国で最も恵まれている地域であった。広州は急速に成長し、生業から日常生活に至るあらゆる面で周辺地域に影響を及ぼしていた。仏山、順徳などは衛星都市として発達し、その周辺農村を生糸などの原材料の生産地に転換させた。恵まれているとはいえ、狭い地域でありながら、高い人口密度と経済規模の拡大により、激しい競争が生まれ、協力の必要性も高まった。したがって、靈獣舞としての醒獅は招福、厄除けのほか、都市のように法律が整っていない農村地域では、村同士の“付き合い”と“競い”の

役割も果たしてきた。

醒獅の最も大きな特徴と言え、その武術との繋がりにある。レベルはまちまちではあるが、醒獅ができる人は武術ができる人と、地域社会では認識されている。清代には、広東の武術はすでに十分熟しており、武術人口も多かった。そうしたことから、醒獅の技は難しく華やかになり、ある程度定式化されたことにより、競うことが可能になっていった。都市部の武術をするの間では、醒獅は戦わずに勝負する手段の一つとして用いられる一方、農村部では、いまなお行事と結びつき、村同士の親交と競争の手段となっている。

農村における醒獅比べは、主に旧小正月の前後に行われる。村ごとに期日を決め、友好関係のある村に招待状を出し、醒獅大会を開催する。当日、小学校のグラウンドや広場で宴会を開き、来客が多ければ多いほど、村の実力が誇示され、好運が齎されると信じており、来る人皆にご馳走する。その後、来客に囲まれる中、参加者の年齢や技のタイプにより、何組かにわけて醒獅比べを行う。賞金は多くはないが、勝利は最大の名誉となる。

このような村同士の“付き合い”と“競い”の性格を持っている地域的な行事は、醒獅大会以外にもまだいくつかある。友好関係があれば招待し、なければ往来はしないが敵ともしない。地域社会の微妙なバランスを保持する大きな力になっている。



醒獅の典型的な獅子頭のひとつ、
『三国志』の劉備をイメージしている。